

情報の共通化の推進がある。それは第一に、1970年代以降に官衙遺跡の発見例が増加し、その調査研究が注目され始めてきたこと、第二に、柱穴をいきなりの半截・完掘して貴重な情報を抽出できていない現場が多かったこと、第三に、最新の知識・技術や調査成果が共有されず、発掘方法や遺跡の保存対策に苦慮している状況があったからだ。

そうした状況を改善すべく、官衙研修や調査助言、情報のデータベース化と公開、『古代の官衙遺跡』の編集などをおこない、また、古代官衙・集落研究集会を通じて、各地の調査員や研究者との情報交換やネットワークの構築なども図ってきた。このように、文化財行政に資する研究課題を自ら設定し、それに取り組める環境を与えていただいたことに感謝したい。

官衙遺跡はなかなか自らの正体を明かしてくれない。その正体を見破る万能試薬の調合もままならないから、遺跡の性格を早くと確に判断することは容易でない。一方、そのようにやっかいな遺跡だけに、官衙関係遺跡との対話は、謎解きや未知との遭遇という楽しさを味わえる世界でもあった。また、官衙遺跡は律令国家の成立や変遷を探るうえで重要な位置を占めているから、学生時代に抱いた歴史学的国家論などへの熱い思いを呼び覚ましてくれる機会でもあった。その意味では大切な人に巡り会ったようなものだ（奈文研では、人生の伴侶となる人にも巡り会っちゃったのだが）。

この仕事は、諸先輩が培ってこられた資産や同僚など皆様の協力のお陰で進めることができたことは言うまでもない。しかし、奈文研の資産に38年間の利息を付けて恩返しできたのか、甚だ心もとない。

膨大な集落遺跡の資料を歴史資料として生かし、その発掘の意義を市民に示すことなど、国内にも文化財行政に資すべき研究課題は山積していると思う。今後は皆様のご活躍を一市民として見守りたい。

（文化遺産部長 山中 敏史）

私がしてきた仕事

70年安保闘争など学生運動のうねりの中で、新たな世界を展望する歴史学への思いを抱きつつ奈文研に入所してから、38年が過ぎる。その間、私が携わってきた仕事の一つに、官衙遺跡発掘技術の向上と

 退職者のひとこと



前列左から、西村管理部長、千田上席研究員、山崎副所長、山中文化遺産部長
後列左から、小林企画調整部長、飯田業務課専門職員、西口考古第二研究室長